



シナノキンバイと槍ヶ岳/吉阪

毎年このことであるが梅雨のあいまに晴れた暑い天気がつづくようになると、必ずといっていいくらい、六十年も前のことではある

が、三田山上のピカカスホールの山岳部の部屋に集って、夏山の登山計画の準備をしていたことが思い出される。

私は元来旅行好きであつたけれど、私が山にとりつかれたのは、小島鳥水さんの、日本アルプス三巻を読んでからである。

その頃季節も春の終り頃だと記憶しているが、母の御使いいかなにかで赤坂の「洗い張り屋」に行った帰りに、今のアメリカ大使館の正門あたりにあった当時三会堂といわれた前を通ると、そこで日本山岳会の大会と展覧会とが開催されているので入場し、その陳列された写真やスケッチに引きつけられて、早速入会の手続きをしたのであつた。それが私の会員番号三百九

わが山へのふれあい

藤山愛一郎



1980年(昭和55年)

8月号(No.422)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

わが山へのふれあい	(藤山愛一郎).....(1)
今シーズンの八千に峰(下)	(1)
第五回講演会(科学委員会)	(2)
山岳と科学 西堀栄三郎会長	ネパール登山規則の改正(上)
(関口周也).....(3)	
図書紹介	山を描くアルピニストたち
(宮下啓三).....(4)	
報告	(5)
山菜山行報告(集会委員会)	尾瀬に再び自然破壊の危機
(自然保護委員会)	岩手支部総会報告
ガルワル隊帰国御挨拶	(婦人懇談会).....(6)
自然保護情報	(6)
鳥海山の自然を守ろう	日高中央横断道路計画とその問題点
お知らせ	(9)(11)
会務報告・ルーム日誌・会員移動	(9)(11)
図書受入報告(図書委員会)	(10)(11)
カット/吉阪・芳野・山本(朋)・松本(慎)	

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

毎月のお知らせと留守番電話
各委員会ごと会員宛発送しておりま
したお知らせは、通信費値上りなどの
ため六月から毎月第一月曜日(理事会)
までに、翌月の行事を集会委員会がう
けつけ、一括して毎月第二火曜日に各
会員宛発送します。会報には今まで同
様掲載されますが、集会に関してはみ
会報をフォローします。

同時に同文のコピーを留守番電話に
録音しますので(電話番号24-六六五
九)ここに電話すれば翌月の山岳会の
活動がわかるようになっております。
ご利用下さい。(集会・中川)

今シーズンの八千に峰(下)

・ヤルン・カン(八五〇五m)
メキシコ大学隊(ホセ・マニ
ユエル・カサノバ隊長ら九人)
メキシコ初のヒマラヤ登山隊。
五月四日、ウーゴ・サルダナ、
アルフォンソ・メデイナの二人
とシエルパのチャワン・レンジ
が最終の第四キャンプから出発
メデイナとレンジは頂上直下の
岩場で疲労のため動けなくな
り、サルダナは単独無酸素で登
頂。メデイナを引き上げようと
していた。レンジは凍傷にや
れこれを目撃して下山。第三キ
ャンプでもサルダナの行動が双

山をきれいに「三」は持ち帰る

眼鏡で眺められた。サルダナと
メデイナはこれを最後に消息が
絶え死亡が確実とみられ、隊は
搜索を中止して下山。一九七三年
京大、七五年ドイツ・オースト
リア隊に次ぐ第三登。京大隊の
アクシデントに似ている。

・ダウラギリ主峰(八一六七m)
スイス・アイゼリン・スポー
ツ隊(ハンス・フォン・ケネル
隊長ら十七人)一九六〇年スイ
ス隊が初登した東北稜より四
人、隊員十四人、シエルパ三人
が大量登頂に成功。五月十三日
ケネル(四〇)、フリッツ・ルフ

中になりつつある私共に言われたので、その影響は大きかった。当時の慶応山岳会の学生は理財科の学生か、私のように政治科に在学している者が多かった。鹿子木先生の「プラトンの講義」などに秘かに越境出席したりなぞしたものであった。

その頃は、近頃のように「山はあなたにとって、何か」などという質問は幸いに無かったが、もしその時代に私にその質問があったら、「山は私の恋人です」と答えたい。鹿子木先生の話のあとでなら、「山は私の人間思考の道場で」などと答えたかも知れない。

いずれにしてもこの二つの答えが、その後山に登れなくなっていた私の心の中に織りなして、忘れることのない山への「あこがれ」を形成してきたのではないだろうかと思っている。

私が病気になる前の冬の冬から、冬山に登るためのスキー合宿を越後の熱温泉ですることになっていた。それには私はもう参加出来なくなった。そして慶応山岳会は冬山からロッククライミングになって、スイス・アルプスからヒマラヤ登山へと本格的に歩んだのであった。

その後私は山には登れないが、ヨーロッパ旅行の際、ツェルマツトやグリンデルワルトやシャモニーに行き、二日ないし三日滞在

して山を眺めては来たが、私は日本の北アルプスは標高こそ三千メートルであるが、こんな美しい山々、尾根、溪谷はないと思っっている。沢をわたる時、雪渓を登る時、そして大小の御花畑の美しい中で休む時、また尾根づたいに歩いて四囲の景色を眺める時、いまだに立派な道がついているのかも知れない。

第五回講演会 報告・科学研究委員会

山 岳 と 科 学

西堀栄三郎会長

昭和55年6月26日(木)午後6時半より、ルームにおいて表記講演会が開かれ盛会であった。要旨は以下の通り。

*

第2回講演会における今西錦司君の山岳科学と比較すると、両者の立場の差は大きい。互いに補完的な関係にあるとも言える。彼は生物が専門の学者であって、山

一筋であり、直観的、非人工的である。これに対し私は物理や化学に根ざした技術研究者であって、登山はいわば趣味であり、その態度は解析的、理論的である。ルー・フラインディングの時にも彼は第六感に頼り、私は地図や磁石に頼った。一体学問は間口は狭くても深い必要があり、目標は普遍妥当な真理であって、国境などあり得ない。一方技術研究の方は深いに越したことはないが、広くな

ないが、懐松の中をこえて行く時、可愛い雷鳥が飛びたつ時、また深い溪谷に降りて岩魚を焼いて食べる時など、楽しい思い出と美しい情景とがいまでも私の頭の中に焼きついて忘れることが出来ない。それが日本アルプスを一生涯忘れることの出来ない所以でもある。

くはならず、個性や人格や国柄も問題となる。また技術は人工的なものである以上、自然の一部である山とは矛盾するように思われるが、しかしこれらを追究する立場から見ると、互いに相通するものがあり、お互いに無理なく受け入れられる所がある。

たとえばアインシュタインが学問の最先端の理論を進める方法は、未知の境地に分け入り、様々の困難を乗り越えて行くという点で、やってみないことには結果の判らない技術研究の方法と極めてよく似ている。常に未知に挑戦し困難と闘って行かねばならない登山の魅力もまた、冷静な判断や経験の必要とする技術研究に対し、共通点をもっている。この意味で取組み方は正反対でも、未知の山に対する探究心は今西君と同じで、共に楽しい登山を行うことが

今シーズンの八千峰

ジンガー(五四)、シェルバ、アン・リタ(三六)、五月十四日、ハンス・ジンマーマン(四三)、ハス・エルク・ミューラー(三〇)、ヨセフ・ブホルツァー(三二)、レイモンド・モンネラツト(三〇)、五月十八日、グラフ・フレディ(四三)、マルセル・レブデイ(四一)、ハンス・バードステイラー(オーストリア)(四四)、ハンス・イーター(西ドイツ)(三四)、マイク・バルマン(三四)、ルドルフ・ペリカー(三〇)およびシェルバ二人(これは無酸素、五月十九日、シモン・バークハーズ(四五)、ジャン・ミューラー(二九)、シエルバ、アン・リタ(二度目)一九六〇年以来六隊目の成功。



英国、フランス、ポーランド国際隊(ワジティック・クルティカ隊長ら四人)五月十日、酸素固定キャンプ、シェルバなしで未登の東壁から速攻、五月十八日、クルティカ(ポーランド)、ルドウィヒ・ウイリジンスキ(ポーランド)、アレキサンダー・マッキンタイヤー(イギリス)、ルネ・ギリニ(フランス)の四人が全員登頂。

・シシャバンマ・ゴサイントン(八〇一二)

西ドイツ隊(マンフレッド・アベレン隊長ら十四人)チベットの側から挑戦、五月七日、ギンター・シュトルム副隊長、フリッツ・ジンツル、マイケル・ダッハー、ウォルフガング・シェファートの四人が北壁から無酸素で登頂。五月十二日、北

東壁からジグフリッド・エツプファウアー、マンフレッド・シュトルムの二人が登頂。

・マカルー(八四八)

米国籍(ジョン・ロスケリー隊長ら四人)

五月十五日、最後の第四キャンプから

ロスケリー、クリストファー・コボクジャスキー、ジェームス・ステートの三人が出発、途中二人が疲労のため断念、ロスケリーは単独で十三時間半の登攀の後、午後三時半登頂。ルートは一九七一年フランス隊の登ったウエスト・ピラー。

なおマカルー(七六四〇)へも米国籍のバークレー隊(ジェネ・ホワイト隊長ら七人)が無酸素で西壁から挑戦したが、五

できた。技術研究の在り方自体について、登山からいろいろなことを教えられた気がする。同時に技術研究の考えを山道具等に適用して様々の創意工夫を楽しむこともできた。

つまり私の場合、山といっても娯楽ではなく、修業に出かけるようなもので極めて真剣である。理論は線だが、経験は点であり、そこでは個々の点のバラツキが重要なのだ。これら乗り越えるのに名人が必要であるように、山でも永年の経験や、常に新しいものを追求する向上心といったものが必要になってくる。そしてこれらは何故山に登るかという問題にもつながるものである。

人間についていえば、人それぞれに個性があり、欠陥もあれば長所もある。それを一つの主義でまとめようとしても無理であって、各人の個性を活用することこそ大切である。これを私は「異質の協力」といっている。芝居には千両役者だけでなく脇役も必要なのだ。今回のチョモランマが成功したとすれば、それは全隊員が「報道を含めた登頂」という、一つの共同の目的のために協力し、各自の個性を十分に発揮できたチームワークのお蔭だといつてよい。ただ宇部君の遭難は誠にショックで悲しむべき事件であった。これをどう受けとめるかは立場によって異なるので簡単にはいえないが、

今さら責任など追求するよりも、少くとも科学的にはこの失敗に大いに学ぶ必要があると思われる。私は今西君を見習って今後も常に向上心なり、理想をもって山や研究に臨みたいと希っている。

(文責・中村純二)

出席者(順不同敬称略) 村井米子、門倉賢、上村信之、橋爪幸達、堀内章雄、宇津力雄、菅野弘章、中村あや、中村純二、三枝礼子、

ネパール登山規則の改正(上)

関口 周也

ネパールの登山規則が昨年十一月十二日に改正された。

「観光法第二〇三五号」(Tourism Act 2035)と「登山遠征規則第二〇三六号」(Mountaineering Expedition Regulation 2036 (1979))が新に制定され、発効し、従来の一九七六年登山規則は同日に廃止



マチャブチャレ/山本(朋)

された。

今回制定された「観光法第二〇三五号」は第四章登山に関する規定というもので、ネパール・ヒマラヤの登山に関する基本的な事項を定めている。登山遠征規則第二

遠藤慶太、河野幾雄、小西奎二、山口一孝、国見利夫、村松紀夫、堀川清、渡辺兵力、入沢郁夫、田村協子、金坂一郎、伊藤隆夫、麦倉啓、金原晃、原謙一、小松原一郎、梅野淑子、山崎勝巳、広羽清伴、伴紀子、栗原敏起、野口末延、折井健一、木下是雄、武田満子、鈴木邦之、坂本正智、関塚貞亨、中川武

〇三六号は、前記観光法第二〇三五号の施行規則で、手続等具体的な事項に関して規定している。従って今後、ネパール・ヒマラヤへ登山のために遠征するときは、この法律と規則の両方を理解する必要がある。

本法には、基本的な事項としてネパール・ヒマラヤへ登山のために遠征する場合に、ネパール政府の許可を得て、規定のロヤリテ(登山料)を納付しなければならないこと、ルートは許可されたルートとし、変更する場合は、予め許可を受けなければならないこと、遠征隊はリエゾンオフィサーを同伴しなければならないこと、ヘッドマン、ガイド、高所用ポーター、ベースキャンプ要員を同伴することができ、これら要員に保険をかけること、同伴する要員はネパール人に限ること、雇員

月十一日悪天候のため断念。

・ロイツェ(八五一ノ一)ノ

フランスのドクター・ニコラ

・ジャジエールが単独無酸素で

南壁から挑戦、四月二十四日、

十五日分の食糧を持ち、五月九

日までにはベース・キャンプへ戻

らなかつたら死んだと思つてく

れと二人の仲間にいい残して出

発、消息不明となった。五月十

三日ヘリコプターが出動してフ

ランス大使館員が搜索したが何

も発見出来なかつた。

ジャジエールは一九七八年フ



ランス隊員として東南稜からエヴェレストに登頂。八二〇ノ地点からスキーで滑降し、一九七〇年七八八七ノサウス・コ

(山崎安治)

今シーズンの八千ノ峰

の解雇の条件、健康診断書の提出義務、遠征隊リーダーの責任と義務等について定められていて、大筋においては、従来の規則のそれと大差はないが、より具体的に明文化されたということが言える。

罰則規定は、旧規則のそれと比べると、かなり具体的で強化されている。即ち無許可で入山した場合またはオーブンされていらない地域へ入山した場合、遠征中に不道徳な行為を行なった場合、ネパール政府に提出しなければならないものを規定の期間内に提出しなかった場合、環境汚染防止のための規則に違反した場合、本法ならびに規則または許可に付けられた条件に違反した場合、いずれも向こう五年間入国を禁止し、向こう十年間登山活動を禁止するとしている。さらに、無許可登山に対しては

は、規定のロヤリティの倍額に相当する罰金を、オーブンされてい

ない山への入山者に対しては、三

〇、〇〇〇ルピー以上四五、〇〇

〇ルピー以下の罰金を課すと規定

している。また環境汚染防止の規

則に違反した者に対して、二五、

〇〇〇ルピーの罰金を課すという

ことも定められている。

登山遠征規則は、本法に基づく

細則である。ロヤリティの額が、

ここで定められているが、六六〇

〇以下八、〇〇〇ルピーが加え

られた以外は旧規則に定められて

いた額と同じであるのでここでは

省略する(会報三六九号参照)。

ならないと改正された。

遠征隊がその雇員に掛けなければならぬ保険金の額も、この規則に定められている。適用する雇員のカテゴリーが若干改正されたので、ここに紹介しておく。リエゾンオフィサーに一五〇、〇〇〇ルビー、ヘッドマンとガイドに一〇〇、〇〇〇ルビー、高所用ボー

図書紹介



山を描くアルビニストたち

宮下 啓三

来年度版の「山日記」のために二十近くの山々を素描する役をあたえられた。楽しくはあるが、かなり手間のかかるこの仕事を終えた今、私は山岳人の世界と日曜画家との関係について書いてみる気になった。

戦後まもなく私は新聞紙上でアマチュア画家を日曜画家と呼ぶことを知った。私が熱心に新聞を読むようになったのが小学校五年の頃からで、日曜画家たちの展覧会の記事を読み、その中に藤山愛一郎氏の名を見出したのは、私と新聞との縁の初期のことだった、と記憶している。やがて私は友人と

ターに七五、〇〇〇ルビー、ペースキャン要員およびローカル・ポーターに五〇、〇〇〇ルビーとなっているが、ローカル・ポーターについては、義務づけられていない。ただし保険を掛けていないときの事故については、保険金と同額の補償金を支払うことと本法において規定している。

協力して学級の壁新聞を制作しはじめ、これが全校規模の活字印刷の新聞にまで発展するに至った。

その新聞の記者というふれこみで私たち豆記者が先生に伴われて丸の内オフィスに大先輩である藤山氏を訪ねし、インタビュしたのは昭和二十三年の秋ではなかったろうか。何を質問したやらと覚えていない。山登りが話題にならなかつたことだけは確かである。私自身が当時山に関心をもっていなかったからである。

藤山氏との御縁はその一回きりだが、この際藤山ジュニアのことを一筆しておこう。昭和二十三年のはじめ、つまり小学五年生の終わり近くに、卒業していく六年生を歓迎する学芸会が計画された。劇の何たるかも知らない私に劇の監督の役があてがわれた。そしてクラスがいの藤山愛作君がその劇の主役を演じた。彼とのこの経験は、私が今や大学でヨーロッパ演劇を研究する人間となるための遠い伏線となったといえそうである。

る。

そのぐクラスもグループも違、大学卒業まで藤山愛作君との間にこれというつきあひもなく終わった。だが、彼と私は、それぞれちがう動機で山に惹かれた。大学時代に彼は工学部の山岳会に所属して熱心に山に登っていたはずで、私は私で同じころ勝手気ままな山旅をしていた。昨年、大学卒業後まもなく二十年前に彼に再会した。私が「今でも山に？」と問うと「ま、ぼつぼつ」という短い返事が、三十年前を思いおこさせるはにかみをふくんだ口調でかえってきた。

私は組織に属さないで山歩きしていたので、行動の自由、とりわけ山行の時間配分の自由を満喫し、思いのままに歩みをとめて山々をスケッチした。基礎体力に劣る私は、疲労をてれかくすために絵を口実にして坐りこんだ。私は山によって日曜画家となった。じつさい、山の絵を描いている私を目にされたからこそ折井健一氏が私の日本山岳会入会に際して推薦者となってくださった、と私は思っている。

日本山岳会にこわごわ入会した私だが、あれから二十年のうちにこの会は次から次へと思いがけない人の縁の不思議さと面白さを私に味わわせつけてきた。今また会の大先輩であるばかりか、私にとって小学校から大学までを通

じての学校の先輩でもある藤山愛一郎氏が会報に寄稿されると聞いて、私は自分の少年時代を思いおこす機会もつ、山への愛着をもちつけてきた甲斐があった。

こうして、私はようやく本題にたどりつく。三十年以上も前に藤山氏の名とともに日曜画家という言葉を知った私は、今、日曜画家のはしくれとして、山の絵、というよりも、山を描く山岳会員たちの仕事の一端について一言しようとしている。

橋本廣氏は富山市の高等学校に勤務するがたわら、ときに高校山岳部顧問として、主に北アルプスの北部の山々に登り、山岳を主題とするスケッチ、水彩画、油彩を描きつけてきた。富山県下の新聞に画文を載せること約二百回に及び、地元での個展も十数回に及ぶ。発表はもっぱら富山県内



でおこなわれているので、一般の会員にはその存在が知られにくい。が、「岳人」や「山と渓谷」の誌上で橋本氏の画文に接することが出来る（たとえば昭和53年12月号

「岳人」。

この橋本氏の昭和二十年代の、二十歳代の山岳スケッチを精選して編んだものが「山旅に描く。若き日の画帖より」（窓出版会発行、一八〇〇円）である。葉書大のスケッチが五十点、中表紙の一葉をのぞいてすべて単色で刷られている。まだ自分自身のスタイルが確立しない若い時期の作品だけに、技法上の実験、題材や構図の決定の仕方など、変化や迷いをかさねていく。その過程を追うことによって、若かりし橋本氏の山を見る目の成長のあとをたどるとき、私は教養小説と呼ばれるジャンルの物語を読むかのような興味をおぼえる。

その橋本氏は「あとがき」で次のようにしるした。「絵を描くだけの目的で山へ登り、心ゆくまで絵筆を走らせたというものは、ずいぶん昔からの私の願いだ。にもかかわらず、いまだにそれがかなえられずにいる。近い将来、絵の道具を担いで、のんびりと山をスケッチしながら旅をしたいと考える私である」この文を書くときの橋本氏は五十代も終わりにさしかかっていた。日曜画家たちの多くが共通にいだく望みを代弁するといふだけのことでない。そうしたいというところに新鮮にもちつづけているというところこそが大事な点なのである。その橋本氏の、「山の美しさにふるえて無心に絵筆を

とったその頃」の山岳スケッチ集をひもとくとき、長く山を描きつづけてきたアマチュア画家たちはかならずや共感をおぼえることであらう。また、すでに七年も前の刊行だが、同じ橋本氏の「北ボルネオの山旅」(新紀元社刊)に収められた数多くのスケッチを見くらべてごらんになるのも一興であらう。

橋本氏が、かなわぬ願いをもちつづけているのに対して、藤江幾太郎氏は、六十三歳にして実業から解放されて画業に専念するに至った。すでに十代の少年時代から

絵画グループに参加していた藤江氏の絵画歴はきわめて長い。三菱鉱業に入社して井元商店を退社するまでの約四十五年間、氏はサラリーマンであって展覧会に出品し、多くの個展を催してきた。その意味で藤江氏は日曜画家の手本ともいべき人なのである。そして今や職業画家として独立している。いわば職業画家たることの証明であるかのうちに、このほど上梓された「藤江幾太郎山の画集」(北荘画廊編集制作、山と溪谷社刊、六千円)は、計八十八点の山岳絵画を収めて壮観を呈している。

藤江氏の油彩は(私個人の勝手ないいかたを許していただけるなら)紫系統の色調の用い方に独自の個性をもっている。その色調が画題により季節により、そしてそのときどきの画家自身の情景によ

って微妙に変化していくさまをたしかめるのは、まことにたのしい。藤江氏は、山そのもののだけのフォルムを追求するというタイプの画家ではなく、海、池、森、田畑、家といった近景をとりこんで、その背後の山のもつ奥行きと高度感を表現する人である。この立体的で重層的な構図のとりかたが、ヒマラヤの雪山を描くときある種の変化をとげたように私には思われるのだが、その変化が何かは藤江氏の画集をひもといてたのしむ人たちの判断にまかせたい。



藤江氏の人柄そのものであるにちがいないが、山は人間を威圧する力を見せつけるものとしてでなく、人間の心をあたかく迎え入れる包容力をもつものとして描かれていく。ひたむきに山のある風景にむかいあって、自然の立体的構図を大自然全体の縮図として切

りと描きとらうとする藤江氏の画業は、こうして大きな画集として編まれてみると、何かなし求道者の自然観察といったものを思わせる。

同じく日本山岳会々員である山里寿男氏の場合は、早くから職業的画家としての経歴をもつ。山里氏は山岳雑誌を舞台にして多くの絵を私たちに見せてくれている。いかにも右利きの人らしく、左上がり右下の方向へ流れる線を力強く引いて影をつける山里氏の山岳デッサンはつねに鋭利とした生氣をもつ。生命なき岩石の塊である

はずの山々が、山里氏にかかるとたんなるオブジェではなくなっている。躍動しはじめのかのようだ。しかし、私は今さらに山里絵画論をひけらかすつもりをもっていない。そうではなくて、山里氏の「山のスケッチ手帳」と「旅のスケッチ手帳」(ともに山と溪谷社刊、六五〇円)を、橋本氏や藤江氏らにつづいて、これから山を題材とする日曜画家になろうとする人たちのためにおすすめするの

が、私の目的である。絵を描くのにこだわりの無用だという前提で、山に登り、旅をするにつけ、スケッチという行為がどれほどか旅をゆたかにするかを説き、初心者のために要領よくこつを教示する。これは、同時に山里氏自身の山岳絵画の生まれかたのプロセスを垣間見せてくれたのしい。

こうして、日本山岳会に属する三人の人たちの近刊書について思いをめぐらしてみるのが、職業的登山家と日曜登山家の区別があり意味をもたないのと同じように、山岳絵画の世界は、プロとアマの分類を仰々しく論じ立てるま

いと思う。山岳会員たちによるアデバンダン展がふたたび催される気運が高まって、三年半前の山岳絵画展が再現されることを、そろそろ積極的にかえはじめてよい頃合いであらう、とも思う。(筆者は慶応義塾大学文学部教授)

集委員会

山菜山行報告

(二岐温泉、大白森山、甲子山)

集委員会主催の山菜山行は今年で四回目。六月六日(金)新宿発の夜行バスで七日(土)早朝に二岐温泉着。小憩の後二岐山登山、二岐温泉大丸屋旅館で懇親会、八日(日)は小丸山、大白森山、甲子山を経て甲子温泉で入浴、その日のうちに帰京するという一泊二日の企画。参加者は八十二歳の永年会員野口末延氏を最年長に六十数人、三分の二が中老年組だった。

ひと昔前の那須や南会津の山は麓の鄙びた湯治場、長いアプローチと「やぶ漕ぎ」の話をよく先輩から聞かされてきた。この奥深く静かな山にも林道が開かれて自動車が入り、余暇の少ない人にも登る機会が与えられた。自然保護を願っている殆どどの参加者が感じるであろうジレンマ。それにしても盛り沢山の企画を準備し、大勢の参加者を楽しませ無事に帰京

させた集委員会のさりげない心くばりと奉仕は、苦心のほどを感じさせないだけに見事だった。大丸屋旅館は十年前まで茅葺きの味のある二階建てだった。望月達夫さんら五人の共著「静かなる山」(茗溪堂)に「会津の二岐温泉」という素晴らしい写真がのっている。近代的に建てかえられたまも露天風呂や溪谷に、往時をしのぶ環境のよさは残っている。

二岐山は優しい姿の双耳峰。南側から一五四四・三の南峰へ登り、北峰を経て反対側を下り、麓の熊笹の高原にかすかに残る路跡をたどりながら温泉に帰った。高曇りの暑い日で夜行疲れの参加者は、自然にいくつかのグループに別れ長い列となって登った。各グループには何時の間にか若い集委員会が一人ずつ一緒に歩いていった。早い組は一時頃に、最後の組

は夕暮近くに帰ってきたが、最年長の野口ご夫妻には加藤前委員長が同行して完登したのは立派だった。また会津の山に造詣の深い望月達夫さんは、過去四回も二岐山を目ざしながら悪天候で果せなかった。今度の山菜行で念願の頂上を踏んだことも特に記録しておきたい。

夜の懇親会は山岳会の現地集會が何時もそうであるように楽しくなごやかに進化した。四月に山岳会監事を退任された山菜の先生片岡博さんに、折井副会長から感謝

ガルワル隊帰国御挨拶

婦人懇談会

女子ガルワル・ヒマラヤ登山隊は、7月中旬帰国予定の富田隊員を除き、6月末に8名が元気に帰って参りました。残念ながらケダルナート本峰の登頂は6月2日からの悪天候のため断念しましたが、ケダルナート・ドームに6名の日印隊員およびシェルパ6名が登頂いたしました。ドームは全員登頂を目指していたのですが、6月2日夜半から悪天の周期に入ったため本峰アタックも中止、9日、BCを撤収して登山活動を終了しま

☆行動概要は次の通りです。

- 5・1 ニューデリー発
- 5・6 ウッタルカシ発
- 5・12 タポバン(四三〇〇)にBC建設
- 5・19 キルティバマーク(四八〇〇)にA BC建設
- 5・24 C II建設(五三三〇)

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

自然保護情報

鳥海山の自然を守ろう

自然保護委員会

東北の名山である鳥海山に大規模な自然破壊の手がのびようとしている。

秋田県企業局のもつ「鳥海山開発構想」である。元来このような自然破壊に嚴重な監視を行い、各種の規制をつくるべき当局者自らが、こうした無茶ともいえる計画を樹てる例が、山梨県の連峰スカイライン、奈良県の大台ヶ原をはじめとして次ぎ次ぎに出てくることは、まことに奇妙なことといわなければならない。

その計画の概要は国立公園鳥海山の北東斜面の五合目抜川の付近から、八合目と九合目の中間にかけ、延長約二七〇〇mのゴンドラ用索道を設置し、一日数千人のスキーヤーや観光客を運ぶもので、付帯して大駐車場、レスト・ハウス、山腹の車道開発等が予定されている。

本会の自然保護委員会では、この問題をとりあげ、理事会の議を経て、既に本庄市にある「鳥海山の自然を守る会」に協力する立場を決定しているが、同時に去る二月、左記の要望書を、秋田県知事、同県会議長、同自然環境保全審議会、県議会厚生委員長、同矢島町長、町議会議長、本庄市長宛に送付してあり、その推移に重大な関心を寄せているので、会員各位の御協力をいただければ幸いである。

昭和五十五年二月一日

殿

社団法人 日本山岳会 会長 西堀栄三郎
社団法人 日本山岳会

自然保護委員会委員長 織内 信彦

鳥海山北東斜面開発構想に対する要望書

昭和五十三年十月二十三日秋田県庁における「鳥海山

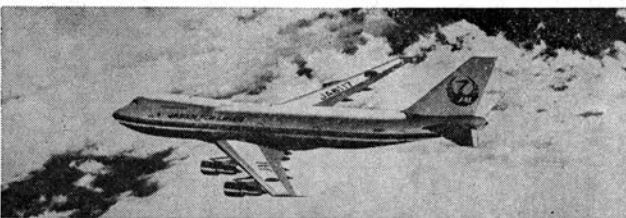
北東斜面開発連絡協議会」で協議された開発構想については既に昭和五十四年四月環境庁からも「自然保護上、重大な支障があり、開発は認め難い」との通告がなされていると伺いましたが、本会も下記の理由でその中止を強く訴えたいと思います。

私共は先輩を含めて、日本の山々をこよなく愛し、親しみ尊び、その美しさに心打たれて来たものであります。しかしながら時代と共に登山者、スキー客、観光客が急増し、交通の発達と相俟ってこれら景観のすぐれた山々の大部分は観光地化の一途を辿って来ました。一方産業による開発も進んで、今や自然のまま残された地域は数えるほどに貴重な存在となつてしまいました。この時に当り国民共通の財産ともいえる人工の加わらない自然を積極的に守り、永く子孫に伝えることは山を愛する者だけでなく、凡ての日本人にとっても何よりのつとめであり、願ひであります。

今回問題と

なっている鳥海山北東斜面は自然の中でも貴重な高層湿原、雪田湿原、溪流、矮小樹林、あるいはブナ原生林など変化に富む植生の見られる所で、鳥海山にだけ生育するチョウカイフスマやチョウカイアザミ等学術的に重要な種の生育地でもあります。

この比類のない亜高山帯



地球は、何回飛んでも新しい。



日本航空

散策組を編成することになり、どの組に入るかは自主判断に委された。山行組は六時半に出発、小白森山に九時到着が条件となった。終電前に新宿帰着のためにやむをえない措置であった。曇っていたが遠望がきく涼しい快適な日だった。例によって自ずといくつかのグループができ、各班に若い委員が付き添ったのも前日と同様だった。初老の某氏は九時五十分過



山本(朋)の山頂

ぎに小白森山に到着、是非行きた希望であったので最後尾に中川理事、村木委員長の二人が付き添った。緑の木立越しに斑雪の飯豊の山なみが遠望された。最後尾の初老氏は遅れ勝ちであったが、甲子峠の林道出合いで疲労が頂点に達した。幸いに地元の自動車に出逢い白河まで送ってもらって無事帰京できたのは何よりであった。初老氏を世話

- ☆ 5・27 CⅢ建設(五七〇〇)
☆ 5・29 CⅣ建設(六二〇〇)
☆ 5・31 第一次ドーム登頂(清水、富田、シエルパ2名)
☆ 6・1 第二次ドーム登頂(根本、小倉、佐藤、シエルパ4名)
☆ 6・2 第三次の4名がCⅣに入ったが夜半より暴風雪となり3日より下山。
☆ 6・6 ABC撤収、BC集結
☆ 6・9 BC撤収
☆ 6・12 ウツタルカシ着
☆ 6・14 ニューデリー着

☆ 隊員10名
L・高本、清水、田中、富田、根本、小倉、市村、佐藤、堀井(ドクター)、ラマ・セン・グプタ(L・Q)
☆ シエルパ(6名)
D・ツェリン(サード)、ア・ニマ(コック)、カルマI、ダワ、ギャルツェン、ナワン・テンバ
登山活動中、隊員の健康状態は良好で、高所順応も順調に行われ、ガルワルの美しい山で非常に来しい山登りをすることができました。会員の皆様から、終始暖かいお心遣いとご援助をいただきましたことを、心から御礼申し上げます。詳細は、いずれ会報でご報告いたしますが、とりあえず帰国のご挨拶と御礼を申し上げます。(高本信子)

に延長二七kmにわたる索道を設置して、一日五千人以上も輸送し、索道建設に必要な道路整備として、現道を拡幅舗装した上、駐車場まで作るとなると一体どんな状態が予想されるでしょうか。標高一、七四〇mの上部停車場付近の諸種の施設や遊歩道が自然の景観を甚だしく損う他、多数の高山植物があるいは観光客に踏みじられ、あるいは融雪防止剤の散布のため枯死することは必要であります。日本海からの第一次風衝地として特に冬期気象の厳しい島海山中間停車場より上部の裾裾がりの雪と氷の大斜面に、冬山に對し無知識、無防備なスキーヤーが多数吐き出された場合、遭難事故の多発は誰の目にも明らかであります。サマスキーの先進地である月山々中のゴミは、集取不能の谷や敷にあふれ、山は窒息状態となっており、島海山でも回収できないゴミと一日五、〇〇〇リットルにも及ぶ尿による環境汚染は目に見えて予想されます。しかも下流には矢島町や島海村の水道取水口があります。駐車場や道路拡張のため数多くのブナ、ダケカンパ、ミヤマハンノキの樹林の伐採も必要であり、車の排気ガスによる影響も無視できません。

さらに島海山の標高一、二〇〇m以上の保護指定地域における他のルートの乱開発を誘発する危険もあって、その悪影響は測り知れないものがあります。このような開発が行われなくても、私共は今後も島海山に自らの足で歩いて登ることによって極めて健全に自然を鑑賞し、山スキーを楽しむ、高山植物その他の野性をいつまでも保存することができ、このような方法で祖先から伝えられて来た島海山の自然を守り、その恩恵を次の世代に伝えて行くことは私達の何よりのつとめであり、誇りでもあると確信するものであります。単に登山の大衆化といった美名や一部のスキーヤーあるいは観光業者の便益のために悔を千載に残すべきではありません。かけがえのない自然を守るといふ日本人全体の将来にも関わる観点から私達は「島海山北東斜面の開発構想」に強く反対するものであります。

貴職におかれましては、このような事情を御理解の上上記開発構想中止の線でご指示を賜りますようお願い申し上げます。

以上

日高中央横断道路計画とその問題点

渡辺正臣

大規模な観光地化が進みつつある日本アルプスを始めとした、高山地帯の環境破壊は、目を覆うものがあるが、北海道においても、大雪山群が同じ運命をたどって、毎日に環境汚染が進みつつあり、わずかに日高山脈一帯だけが、真の原始環境をほこる地域として残っている現状である。

日高山脈は、狩勝峠から襟裳峠へと一四〇キロにおよぶ北海道の背稜をなす大山脈であり、発達した水河地形を始めとした地理的特性や、エゾマツトドマツに加えて、ダケカンパが豊かに繁茂する、日高特有の原生林相を有し、それらに保護されるようにして、自由に生活している数多くの野生動物、中には水河期の生ける化石といわれるナキウサギなどの、巾広い動物相などが見られ、学術的には貴重な地域であり、加えて人を寄せつけぬ峻険さは、よくその原始性を保持していると言えるのである。したがって我々登山をする者たちも、その保護・保全に最大の努力を払ってきたのである。この日高山脈に、いま約一、〇〇〇億円の巨費をかけて、中央横断道路ができようとしているのである。

日高山脈を横断する道路は、既に開通している日勝峠を越す国道二七四号線(通称日勝道路)があり、南には浦河から野塚岳付近を抜け、大樹へ通ずる道道大樹・浦河線が工事に入っている。そしてそのほぼ中間に、第三の横断道路ともいわれる道道静内・中札内線が、昭和五十四年度に北海道開発局によって、開発予定となったのである。問題はこの道路である。

この道路は静内町の静内ダムを起点として、静内川に沿いナナシの沢に入り、コイボクシシベチャリ川源流の標高六八〇mの地点から、ヤオロ

お知らせ

第四回

全国自然保護上高地集會

恒例により、全国各支部より関心のある会員にお集りいただき、九月二十七日(土)、九月二十八日(日)に自然保護上高地集會を開催いたします。全国会員諸兄弟姉妹の積極的な参加をお待ちします。

宿泊場所 山研、西糸屋。

連絡は山岳会事務局まで

利根川に取り込もうというのが東京電力と首都圏自治体の計画だ。本来、信濃川に流れ込むべき水を関東にもらおうという計画に地元福島県、新潟県は反対しているが、自然保護委員会の現地視察の結果では「建設計画地の平滑の滝上部は、深いV字峡となっており、ダム建設は安い。しかも住民がいらない場所なので補償費の支払いがいらぬ。建設工事のための道路も尾瀬御池まで出来ている。許可が下りれば短時間で完成する」ということが判明した。

ダムが完成すると平滑の滝、三条の滝の水は涸れ、崩壊のおそれがある。またダムの貯水が尾瀬ヶ原の泥炭層に浸透して悪影響を与えるであろう、などを危惧する参加者が多かった。

また運動の進め方についても自然保護運動を単なる反対から一歩踏み出し、首都圏の水不足解消のために水道政策の見直しを迫る。水不足は尾瀬にダムを建設しただけで解消しない。飲料水に使われるべき上水道が、工業用水、風呂水洗トイレなど生活用水に使用されている現状を改め、リサイクルを考える。再生用水道を上下水道のほかに新設することも考える。また水不足は政治問題となつているので、政治家へのアプローチは避けて通れない時代となつていなどの意見が出された。

最近の賑やかな尾瀬を敬遠していた大部分の参加者も、久しぶりにみる尾瀬ヶ原の風景に懐かしさと優しさを感じながら、ゆっくりと歩いた。ちょうどワタスゲの結実期で夕暮れの温泉小屋の二階から、眼前にひろがる夢のような風景にみとれた。

翌二十九日も長く楽しい一日となった。れんげつつじ、とき草、つるこけもの群落はいまがさかりで、ベンチがあるたぎに坐り込んで眺めた。池塘にはおさこほねが黄色い蕾をつけ、誰れもが日本一の広大な湿原を改めて見直す思いを噛みしめていた。(関塚)

参加者 織内信彦、中村純二、中村あや、松丸秀夫、渡辺正臣、国見利夫、坂本正智、麦倉啓、近藤緑、宅間清子、林桂子、荒野康子、永野志津子、関塚真亨

岩手支部総会報告

一九八〇年四月二〇日

四月五日、陸前高田市玉山の湯でひらいた支部総会で新役員が次の通り決まりましたので、お知らせ致します。

・委員長 佐藤 敏彦 再任

・支部長 高橋 俊紀 再任

・委員 田鎖 寿 再任

・指導・遭難対策 小野寺正英 再任

・自然保護 菅原 省司 新任

湯浅 俊行 再任

近藤 有慶 新任

和田 庄司 新任

小田島政行 再任

村上 力 再任

阿部 国雄 再任

安井 豊 再任

・監事

なお支部設立十周年を記念して「かぬか平の山々」(仮題)を出版する予定です。

岩手支部事務局

盛岡市茶畑一〇一六

グリーンビレッジ2F

神農診療所気付付

電話(〇一九六)五一八二四一

会務報告

7月理事会

7月7日午後6時30分

本会ルーム

出席者 西堀会長、折井、渡辺副会長、宮下、中島、飯野、中川、鈴木、中村、小倉、倉知、川上、嵯峨野、山口、越田、菅沢、岡沢

各理事、山崎、河野、村木、大塚

小原(昭)各評議員

委任 鴨原監事、高本、大森、高橋各理事

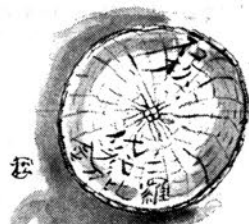
・審議事項

▽日本山岳会静岡支部規約の一部改正について(折井)

本会支部設立並びに運営等に関する規定(昭和41年4月制定)により同支部の規約を一部改正した。

▽ユクシン・ガルドンサル(七五三〇)登山計画に対する推せん(中島)

都立神代高校山岳部OB会が一九八一年六月〜八月に派遣する。



承認

▽オデル氏来日の件(鈴木)

渡辺副会長、鈴木、中川理事が担当、同氏は8月24日に来日し、9月12日帰国の予定。

了承

◎報告事項

▽集會委員会(中川)

(1)新入会員へのあいさつ状を本年度入会者へ発送する。

(2)チョモランマ登山隊報告会を8月22日私学会館で開く。

▽婦人懇談会(山口)

ガルワル遠征は無事終了、全員元気に帰国した。ご支援に感謝します。

▽自然保護委員会(鈴木)

北海道日高中央道路建設に対する反対要望書を会長名で北海道知事に提出した。

▽山研の利用状況について(小原)

前年に比べ利用者が減っている。上高地の各旅館等も減少している傾向にあるが、山研利用呼びかけに協力されたい。

ルーム日誌

(55年6月)

4日(水) 三水会

9日(月) 理事会

10日(火) 山研委員会

11日(水) 図書委員会

13日(金) 自然保護委員会

16日(月) 青年懇談会

19日(木) 婦人懇談会

20日(金) 科学研究委員会

25日(水) 東京薬科大 集會

26日(木) 科学研究委員会講演

今月の来室者43名

会員移動(6月)

物故

七四〇八 鈴木 祐幸(55年5月51歳)

名称変更

七九四二 日本ヒンズークシユカラコルム会議→日本ヒンズークシユカラコルム研究会

図書受入報告

図書委員会

昭和 54 年 11~12 月受入図書(つづき)

- 6 須田義信著「クライミングの基礎技術」山と溪谷社 1979 (版元寄贈)
- 7 登歩溪流会編「遠い頂・ヌプツェ」ベースボールマガジン社 1979 (版元寄贈)
- 8 金久昌業著「北山の峠・京都から若狭へ」ナカニシヤ出版 1979 (版元寄贈)
- 9 日本地図資料協会編「古地図研究」国際地学協会 1979 (版元寄贈)
- 10 日本山岳会編「山日記・1980年版」茗溪堂 1979 (版元寄贈)
- 11 岡本包夫著・発行「続・蜜柑の皮」1979 (著者寄贈)
- 12 小西政雄著「マッターホルン北壁」中央公論社 1979 (版元寄贈)
- 13 筑摩書房編・発行「明治大正図誌・16・海外」1979 (版元寄贈)
- 14 山中山岳会編・発行「Trekking Report of Nepal Himalaya 1978」1979 (佐々保雄氏寄贈)
- 15 堀勝彦編「三代の山・瀧門次・嘉代吉・孫人」上条輝夫 1979 (版元寄贈)
- 16 重村伝平著「三角点を求めて・四百山に登る」日刊工業新聞社 1979 (著者寄贈)
- 17 島田・串田・山崎・近藤編「小島鳥水全集第7巻」大修館書店 昭和 54 (版元寄贈)

昭和 55 年 1~2 月受入図書

- 1 日本山岳会「1976・第2回日印合同女子ヒマラヤ登山隊報告書」1976 (版元寄贈)
- 2 東京ヒマラヤ登山隊「白き魔神の山」1979 (雨宮節氏寄贈)
- 3 デルヴァ・マーフィー著/中川弘訳「シルクロードを全速力」社会思想社 1979 (訳者寄贈)
- 4 吉田喜久治著「山が山であったころの山登りの話」木耳社 1979 (著者寄贈)
- 5 村井英著「高峰への挑戦」岳書房 1979 (版元寄贈)
- 6 長越茂雄著「谷川岳研究」朋文堂 昭和 29 (図書交換会買上げ)
- 7 伊藤源次郎著「佐渡の地質と植物」佐渡弥彦国立公園期成同盟会 昭和 25 (図書交換会買上げ)
- 8 大沢橋次著「国定公園・弥彦山脈」新潟県教育庁西蒲原出張所 1950 (図書交換会買上げ)
- 9 大谷亮吉著「伊能忠敬」名著刊行会 1979 (購入)
- 10 甲斐叢書刊行会編「甲斐叢書第1巻」第一書房 1974 (購入)
- 11 甲斐叢書刊行会編「甲斐叢書第6巻」第一書房 1974 (購入)
- 12 W.R. Neate "Muontaineering and its Literature"



Cicerone Press 1978 (購入)

- 13 A. Steinitzer "Der Alpinismus in Bildern" R. Piper & Co. 1913 (沼倉寛二郎氏寄贈)
- 14 R. Morse "The Mountains of Canada" Hurtig Publishers, 1978 (鶴岡元之助氏寄贈)
- 15 B. Pattar "The Canadian Rockies Trail Guide" The Hunter Rose, 1975 (鶴岡元之助氏寄贈)
- 16 P. Ament "Master of Rock" Alpine House, 1977 (益田幸郎氏寄贈)
- 17 H. Carr "The Irvine Diaries" Gaston-West Col Publications, 1979 (版元寄贈)
- 18~21 H.B. De Saussure "Voyages dans les Alpes" Tome premier-quatrieme, 1779-1796 (購入)(註)会報 No. 401 記事参照
- 22~29 信濃教育会北安曇部会「北安曇郡郷土誌稿」第1輯~第8輯(復刻)長野県北安曇教育会 1979 (購入)
- 30 メスナー著・横川文雄訳「冒険への出発・五大大陸の山々で」山と溪谷社 1979 (版元寄贈)
- 31 マーチ著・竹田雅子訳「現代氷雪登山技術」岳書房 1978 (版元寄贈)
- 32 伊藤和洋著「ネパール」平河出版社 1979 (版元寄贈)
- 33 高見和成編「Latok III 1979」広島山の会 1980 (高見和成氏寄贈)
- 34 竹馬敏広著「樽前山・甕える火の山ーその自然と人間の記録」苫小牧郷土文化研究会 1979 (版元寄贈)
- 35 五百沢智也著「鳥瞰図譜=日本アルプス」講談社 1979 (版元寄贈)
- 36 秋田山想会編「登山総ガイド・太平洋」秋田文化出版社 1979 (版元寄贈)
- 37 川崎精雄著「雪山・叢山」中央公論社 1980 (版元寄贈)
- 38 青柳裕樹著「山スキーの技術」白山書房 1980 (版元寄贈)
- 39 内田良平著「ヒマラヤ・ネパールの雪と岩と光」朝日ソノラマ 1980 (著者寄贈)
- 40 Foreign Languages Press "Another Ascent of the World's Highest Peak-Qomolangma" 1975 (施雅風氏寄贈)

昭和 55 年 3~4 月受入図書

- 1 勝田甫著「積雪期登山」(復刻版)学会出版センター 1979 (版元寄贈)
- 2 本多勝一著「北海道探検記」すずさわ書店 1980 (版元寄贈)
- 3 明治学院大学ヒマラヤ遠征委員会編・発行「ヌン東稜・1978」1979 (版元寄贈)
- 4 出海栄三著「山岳遭難の教訓」岳書房 1979 (版元寄贈)
- 5 藤島玄著「越後の山旅・上巻」(再版)富士波出版社 昭和 55 (著者寄贈)

図書受入報告

~81・《7/16(木)~8/14(金) 30 日間》

パミール山脈(募集定員 10 名)

学術調査登山隊

- レーニン峰(7,134m)登頂
- 国際パミールキャンプ参加
- その他 5,000~6,000m 級登頂可能

=ソ連の山と旅の専門旅行社=

案内書呈 (株)日ソ旅行社 政府登録一般第 98 号
 電話 404-1751(代) | 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-20-1
 担当: 石元広昭 | パークアベニュービル。

洋山岳書古書・新書 通信販売

- 取扱書世界全域山岳・探検・紀行・報告書。
- 探求書がございましたらお知らせ下さい探します。
- 洋山岳書でご用済のものがございましたらお譲り下さい。誠実評価。

カタログご希望の方は、郵券 ¥200 分同封ご請求下さい。

堀内章雄 〒151 東京都渋谷区代々木 1-21-9
登山とスキーの店山幸内 ☎370-1100

あとがき 八月初め、いつも無理矢理山を歩かされていた子供にめずらしく頼まれ、常念から大天井回りで、三十年ぶりに槍へ登りました。今夏は登山者が少なかつたせい、大天井の近くで、かもしかに会ったり、山は大サーピスしてくれました。かもしかに会えて子供は大満足でしたが、こちらは増えすぎて飛騨のような騒ぎを起こさなでくれよ、と些か複雑な気持ちでした。(〇)

昭和五十五年九月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五—四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(261) 四四三三

振替口座東京三—四八二九番

印刷所

東京都港区赤坂二丁目三番六号

株式会社 技報堂